

第3章 原の辻遺跡の調査区ならびに遺構と層位

宮本一夫

1. 調査区の位置

1951年の第1次調査地点は、原の辻遺跡の主体部である台地の東北隅で行われた（図6）。1939年の錫田忠正氏の調査地点に隣接して設定されている（高倉1982）が、1939年の調査を踏まえ出土遺物の多さと分層が可能である点を考慮して、トレンチが設定されたものと考えられる。この調査では、上下の2層に層位区分がなされ、原の辻上層式の設定がなされた。さらに、この原の辻上層式土器を検証する意味で、1961年の第5次調査地点では、第1次調査地点に重なるように「口」の字形のトレンチが設定されている。1974年以降に行われた沓崎市教育委員会や長崎県教育委員会の発掘調査により（長崎県教育委員会2005）、集落を囲むように弥生時代中・後期の多重環濠が検出されている。1951年の1次調査と1961年の第5次調査の第1・第4トレンチは、ちょうど環濠部分に重なっている。

一方、1953年の第2次調査地は台地の中心部にあたり、多重環濠の内側の集落の中心部にあたっている。ここに四つのトレンチが設定された。第2次調査の第5地点からは、甕棺墓が出土している。これは、翌年の1954年に実施した第4次調査地点よりさらに南側に位置するものである（図6）。

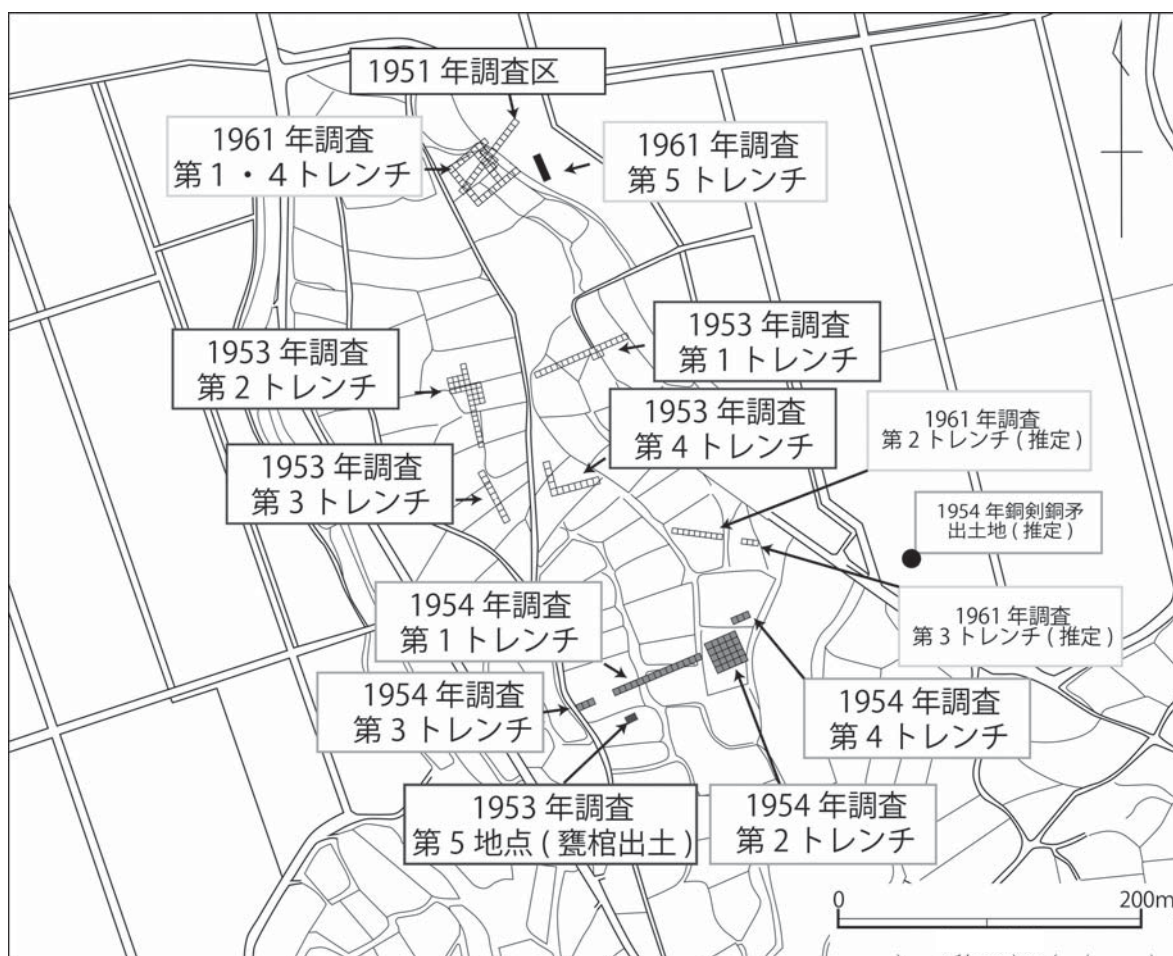


図6 第1次～第5次調査の配置（縮尺1/5000）



図7 原の辻遺跡の地形と第2次調査（1953年）のトレンチ配置（縮尺1/2500）

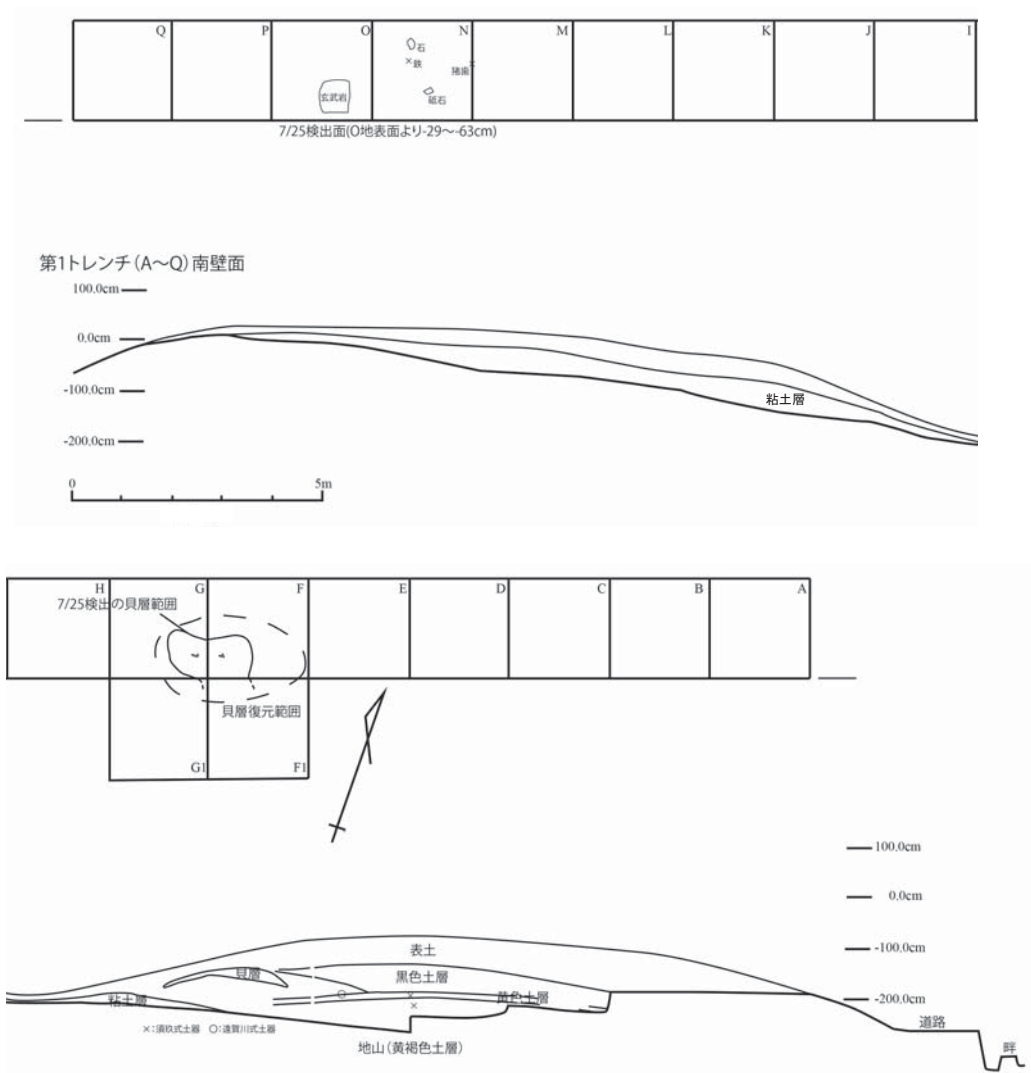


図8 第2次調査(1953年)第1トレンチの配置と層位(縮尺1/150)

さらに1954年の第4次調査では、台地基部に近い地点に、東西方向に直線ないし平行になるように、東西方向に長い四つのトレンチが設定されている。これらのトレンチの一部は内環濠の南端部分にあたっている。

このように、低い台地の北端部である1951・1961年調査地点を起点に、1953年地点を台地の中央部に、さらにその南側の台地基部に1954年調査地点を設けた。以下に、第2次調査、第4次調査、第1次・第5次調査の順に説明していく。

2. 第2次調査(1953年)の調査区の遺構と層位

(1) トレンチの配置

図7が1953年時点の地形図とトレンチの配置である。原の辻遺跡の低丘陵上の中心部分を調査した。当時の原の辻遺跡は土饅頭の畑が幾重にも連なる丘陵であった(図版1-1)。第1トレンチは台地の東裾部から中心部に向けて東西方向にトレンチが設定された。第2トレンチは台地中心部に南北方向に設置されてのち、遺構の検出に応じて東西方向にトレンチを拡張している。第3トレンチは、第2

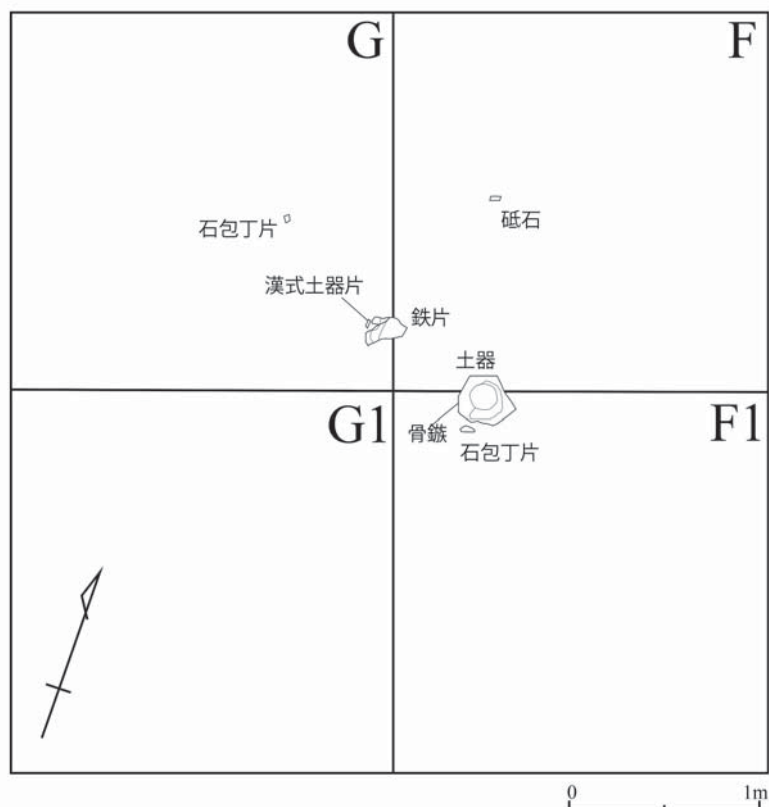


図9 第2次調査（1953年）第1トレンチF・G区遺物出土状況（縮尺1/40）

トレンチの南部分に同じく南北方向のトレンチを入れている。さらに、第3トレンチに平行するように、第3トレンチの東側に東西方向のトレンチを入れ、さらに東側と北側にトレンチを拡張し、L字形のトレンチを設定した。

（2）第1トレンチ

第1トレンチは、2×2mの範囲でA～Q区が設置され、東西14m、南北2mの細長いトレンチになっている（図8）。このうち、トレンチA～G区がダイズ畑に、トレンチI～Q区が芋畑にあたり、トレンチH区が二つの畑の間の小道に相当する。トレンチG・F区では貝層が発見されたため、南側に2×2mのトレンチを拡張し、それぞれG1・F1区と名付けられた。

第1トレンチの南壁の層位（図8）にみられるように、地表面は土饅頭畑に応じて東西方向に丘陵部と谷部を形成している。この丘陵部が畑であり、谷部が二つの畑の間の小道にあたる。本来、西側から東側に向かい緩やかに下る丘陵部の東側斜面に相当している。それを畑にするために饅頭状に改変した状況が見て取れる。トレンチF～P区にみられる地表下の第2層（粘土層）は遺物包含層と考えられる。これに対し、トレンチC～G区の層位は大きく異なり、黄色土層の上に黒色土層、貝層が載るように堆積している（図版1-2）。貝層はトレンチG・F区で検出された。最下層の第4層は地山を掘り込むように堆積しており、ここに遺構が存在していたとみられる。この遺構が廃棄された後に黄色土層が敷かれ、そこに何らかの遺構が形成されている。その廃棄後に貝層が堆積し、さらに黒色土層が堆積している。トレンチG・F区の貝層部分は円形住居址が存在していたところに、その廃棄後に、貝層が形成されたと考えられる。貝層の下位部には、石包丁、骨鏃、韓式土器片などが検出された（図9）。

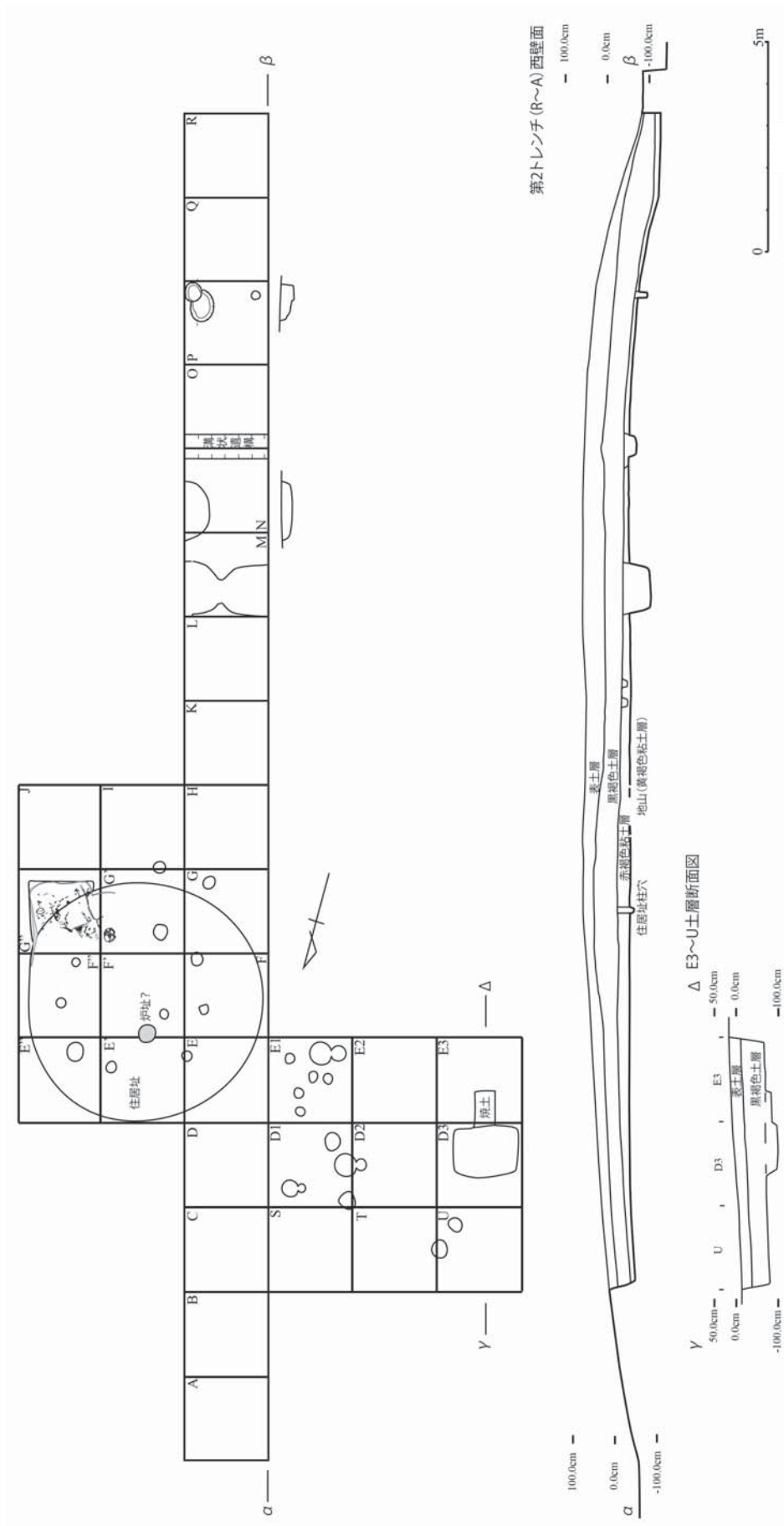


図10 第2次調査 (1953年) 第2トレンチ (縮尺1/150)

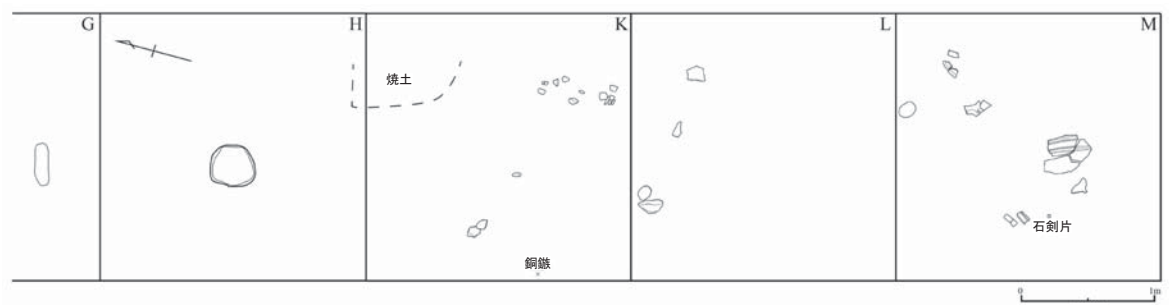


図11 第2次調査（1953年）第2トレンチ G～H 区遺物出土状況

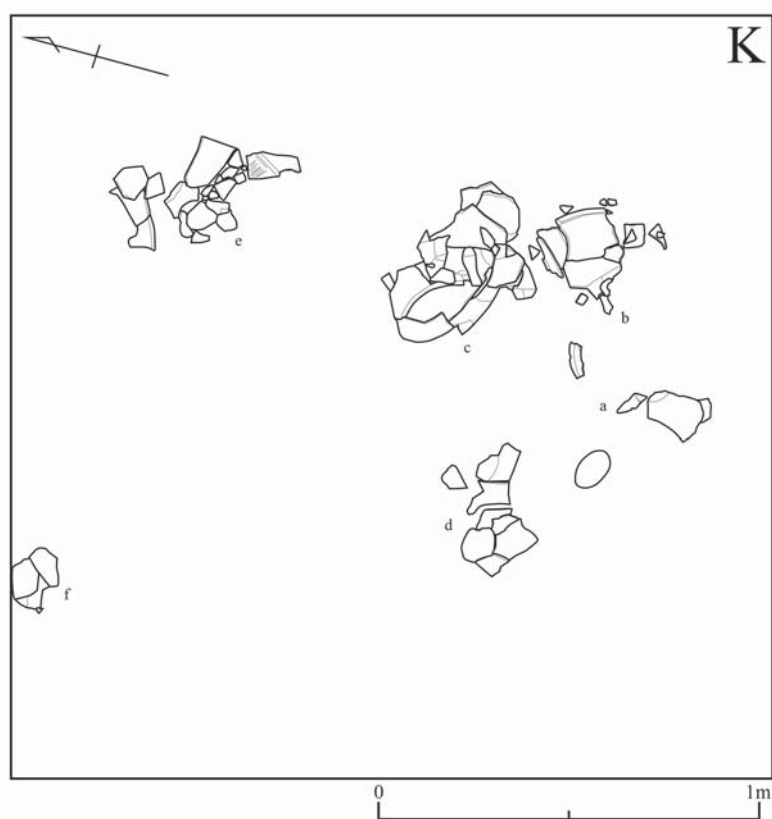


図12 第2次調査（1953年）第2トレンチ K 区遺物出土状況（縮尺1/20）

（3）第2トレンチ

A～H 区の南北16mに及ぶ2×2 mのトレンチ8カ所を設定した（図10）。その後、トレンチ H 区から東方向に I・J 区の二つのトレンチを拡張し、その後トレンチ H 区の南にさらに8カ所のトレンチ K～R 区を設定した。

トレンチ G～L 区のトレンチ H・K 区では、焼土が検出された（図11）。遺構の性格は不明であるが、住居址に伴う炉址の可能性もあろう。周辺からは銅鏃や石剣片が検出された（図11）。銅鏃が検出されたトレンチ K 区では、大型の土器片が検出されている（図12）。そうした点からも、何らかの遺構が存在したのであろう。トレンチ K 区に隣接したトレンチ L・M 区でも土器が密集して出土した（図版2-2）。また、トレンチ C～E 区の西側に6 m×6 mのトレンチ E1～E3区・D1～D3区・S～U 区の拡張区を設定した。この拡張区からは複数の柱穴と土坑が発見された（図版3）。

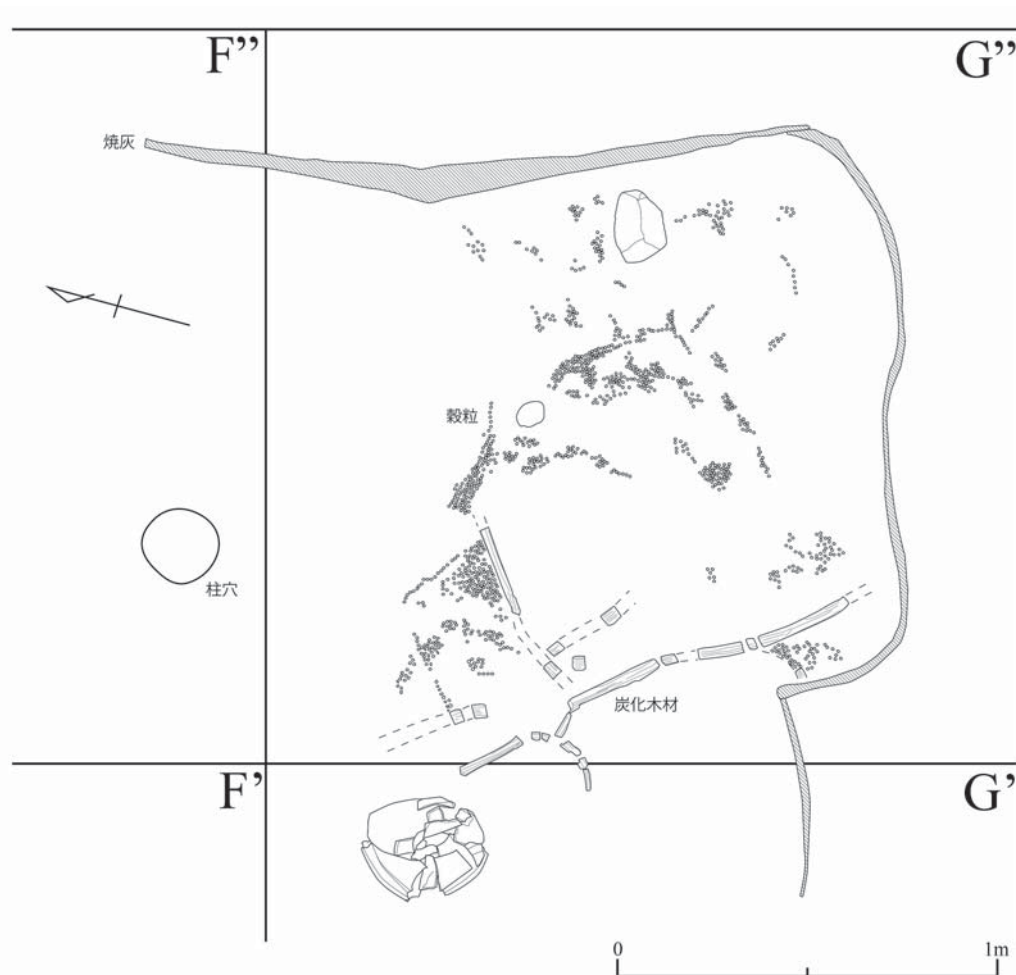


図13 第2次調査（1953年）第2トレンチ F'～G'' 区の2号方形住居址（縮尺1/20）

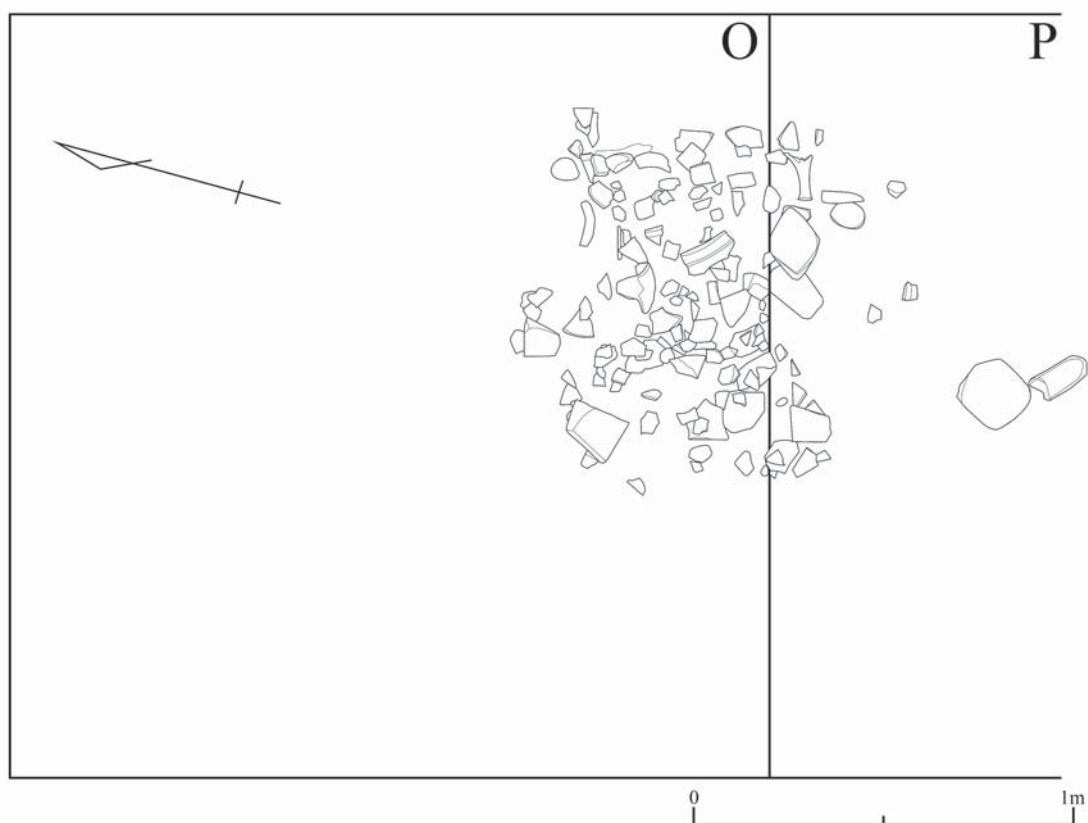


図14 第2次調査（1953年）第2トレンチ O・P 区遺物出土状況（縮尺1/20）

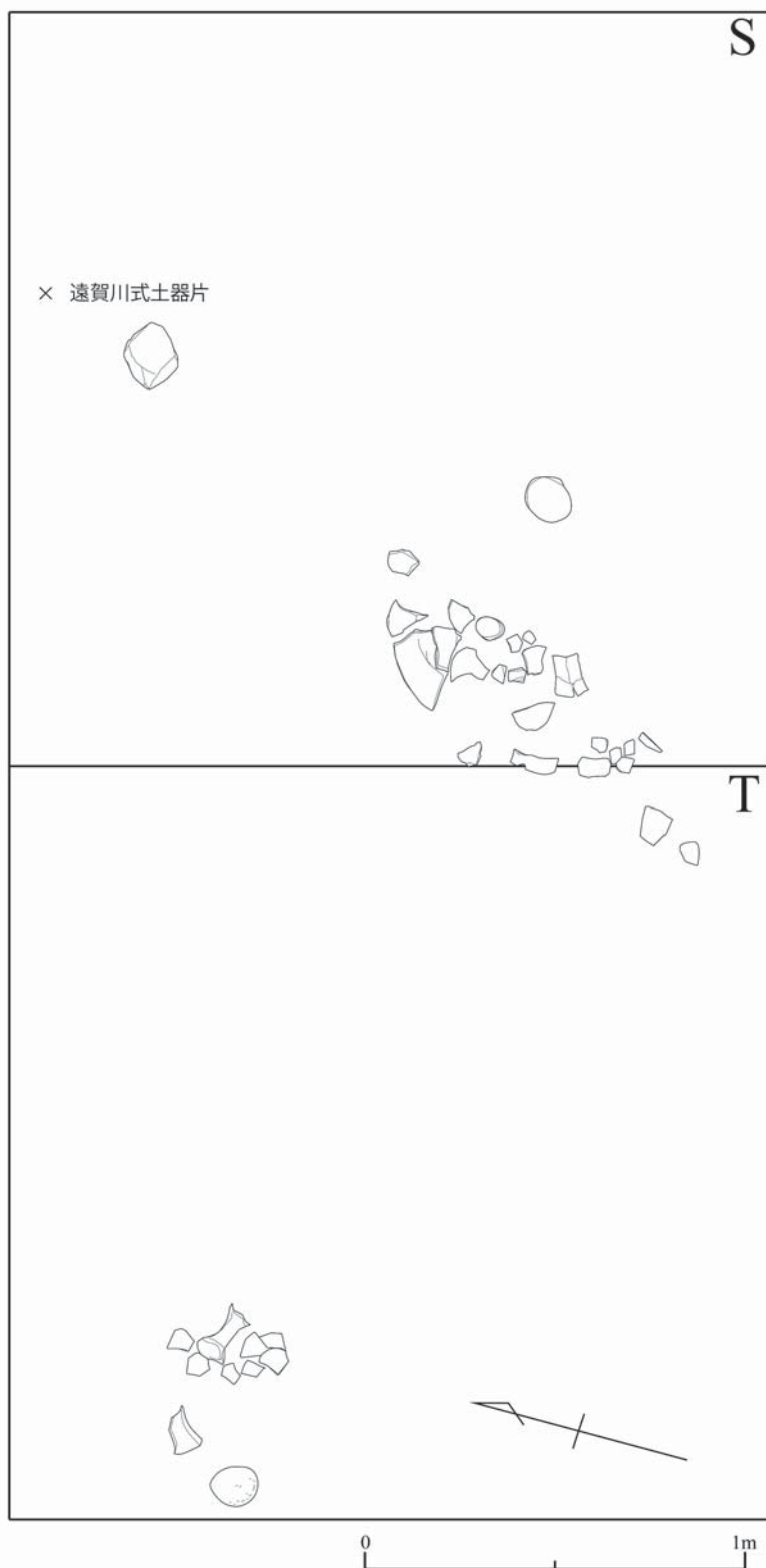


図15 第2次調査（1953年）第2トレンチ S・T 区遺物出土状況（縮尺1/20）

さらに、トレンチ E～G 区では遺構らしき落ち込みが発見されたところから、さらに東側に 4×6 m のトレンチを拡張し、E'、E''、F'、F''、G'、G'' トレンチを設定した。ここからは円形住居址が検出された（図版 3-2）。この 1 号住居址は、住居址の中央部に炉址を持つものであり、弥生時代の円形住居址と考えられる（図版 4）。G'G'' からは炭化米が出土しており（図10・13）、炭素年代の暦年較正年代は $204 \sim 151 \text{calBC}$ （43.5%、 1σ ）、 $210 \text{calBC} \sim 97 \text{calBC}$ （63.8%、 2σ ）を示しており、おおよそ弥生中期の須玖 I 式の年代に相当する。第 4 章で述べるように、1 号住居址から出土した土器も須玖 I 式が主体であり、炭化米の炭素年代と調和的である。一方、この住居址の南西部を切るように、トレンチ G'' からは、方形の遺構が検出されている（図13）。方形部分は炭層によって囲まれているが、おそらく壁立ち住居の壁部分を意味しているであろう。これを 2 号住居址と呼ぶ。内部には炭化木材とともに、多量の炭化米が検出されており、図13の穀粒と記されたものが炭化米である。炭化材 1 点の暦年較正年代は $24 \text{calAD} \sim 80 \text{calAD}$ （59.3%、 1σ ）、 $7 \text{calAD} \sim 122 \text{calAD}$ （91.9%、 2σ ）であり、弥生時代後期に相当する。また、この炭化材の樹種同定の結果は、サンショウ属であり二次林の先駆種であると

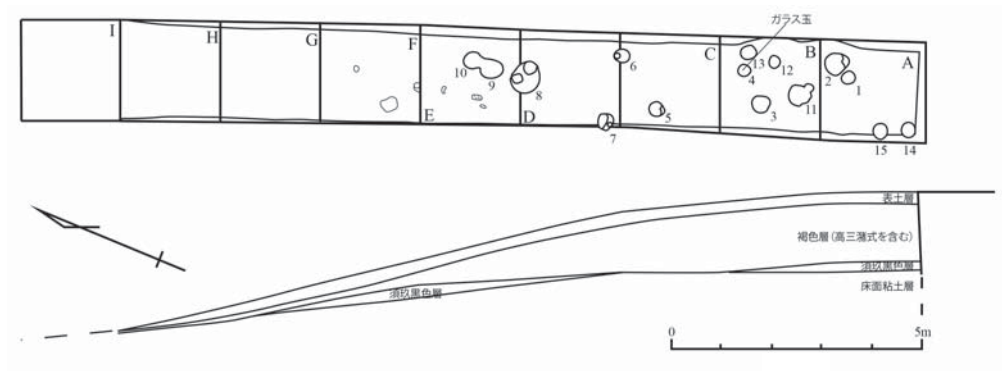


図16 第2次調査 (1953年) 第3トレンチ (縮尺1/150)

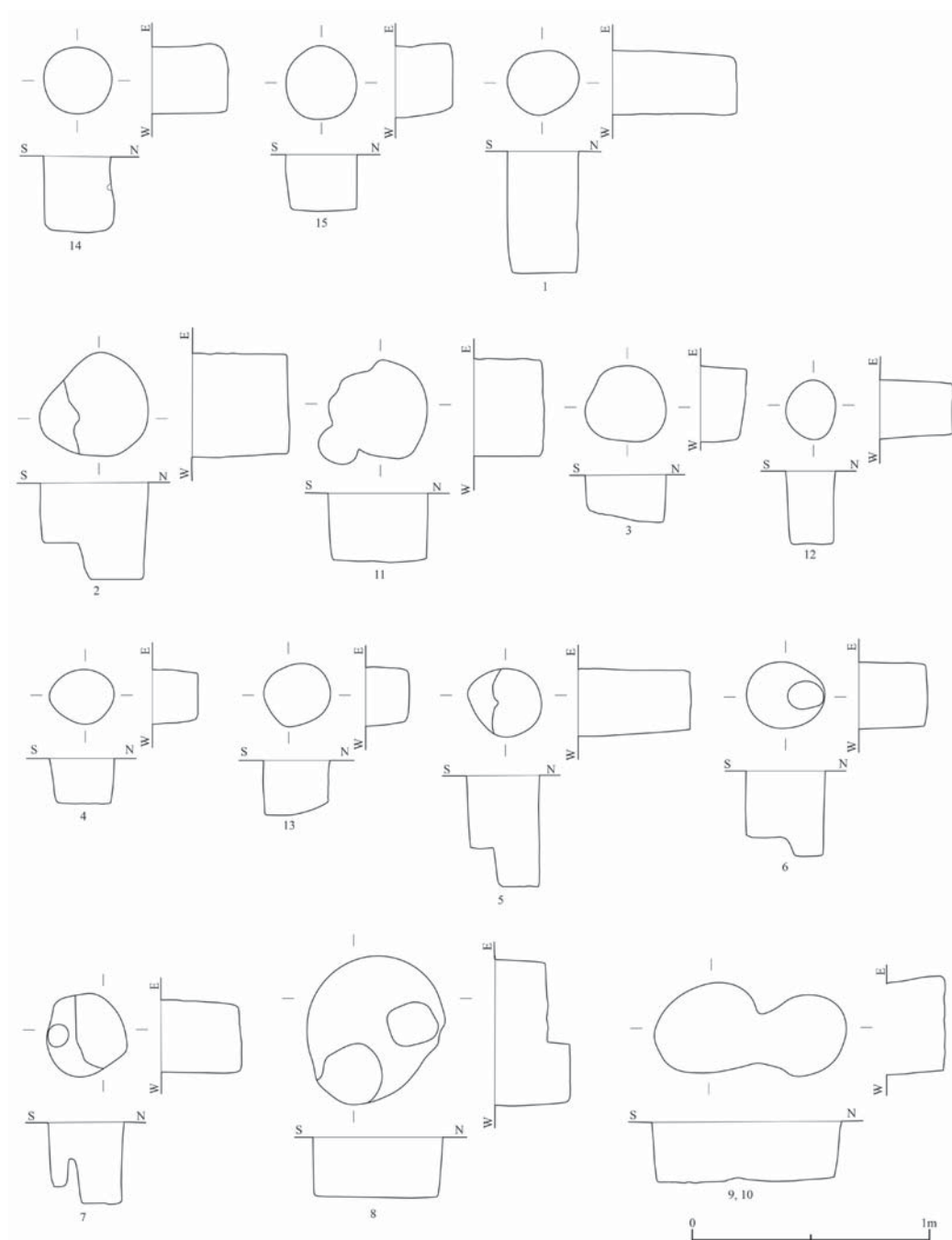


図17 第2次調査 (1953年) 第3トレンチ検出の柱穴 (縮尺1/30)

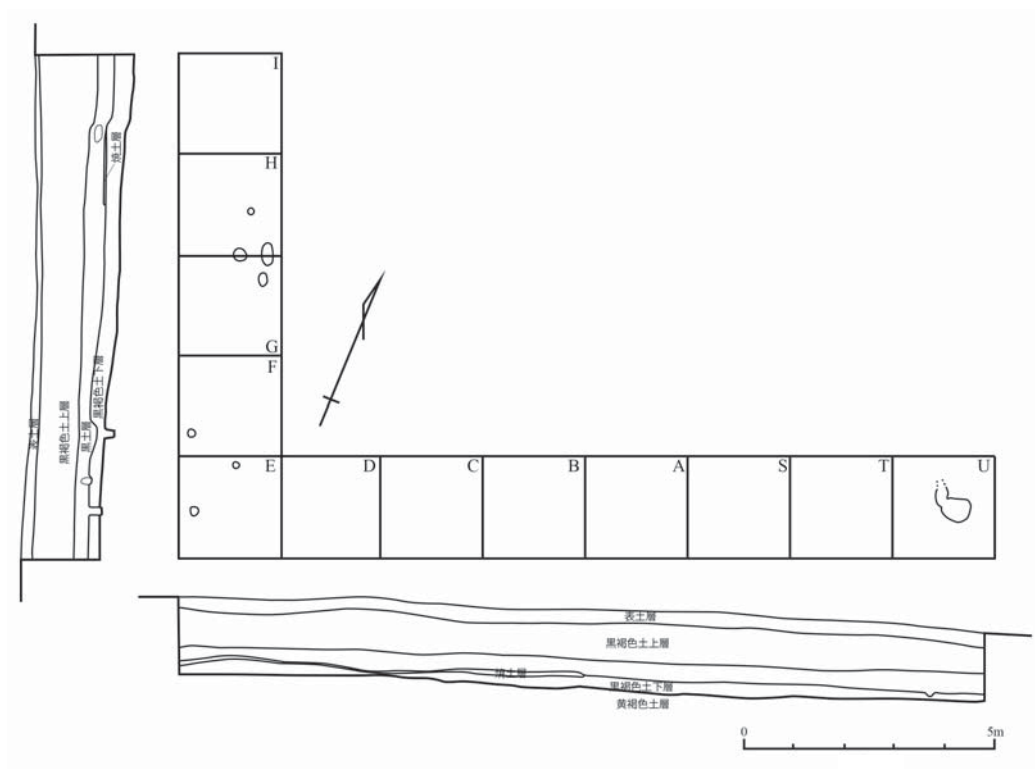


図18 第2次調査（1953年）第4トレンチ（縮尺1/150）

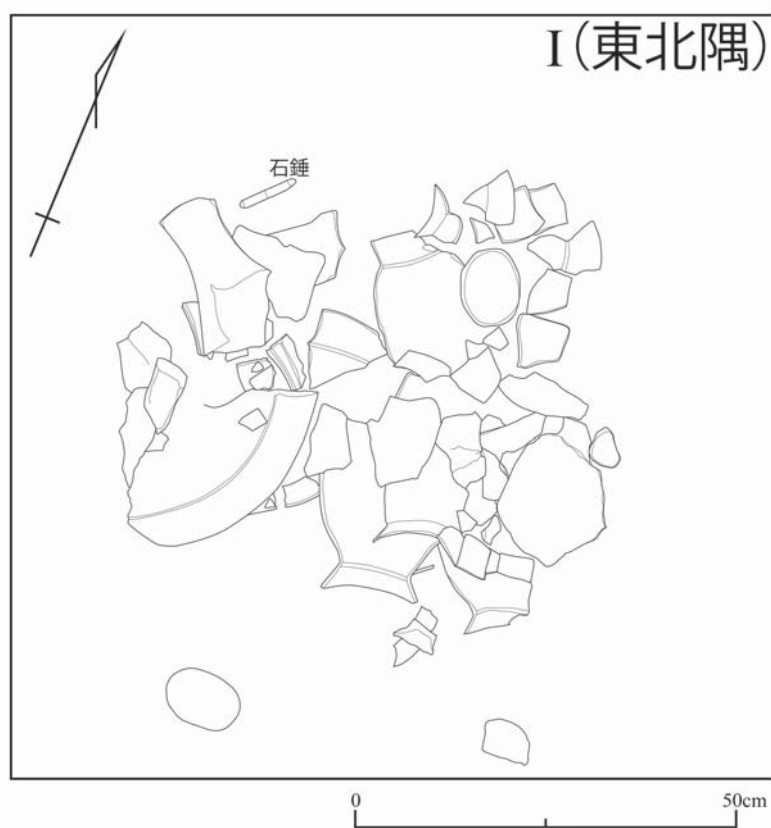


図19 第2次調査（1953年）第4トレンチ出土遺物（縮尺1/10）

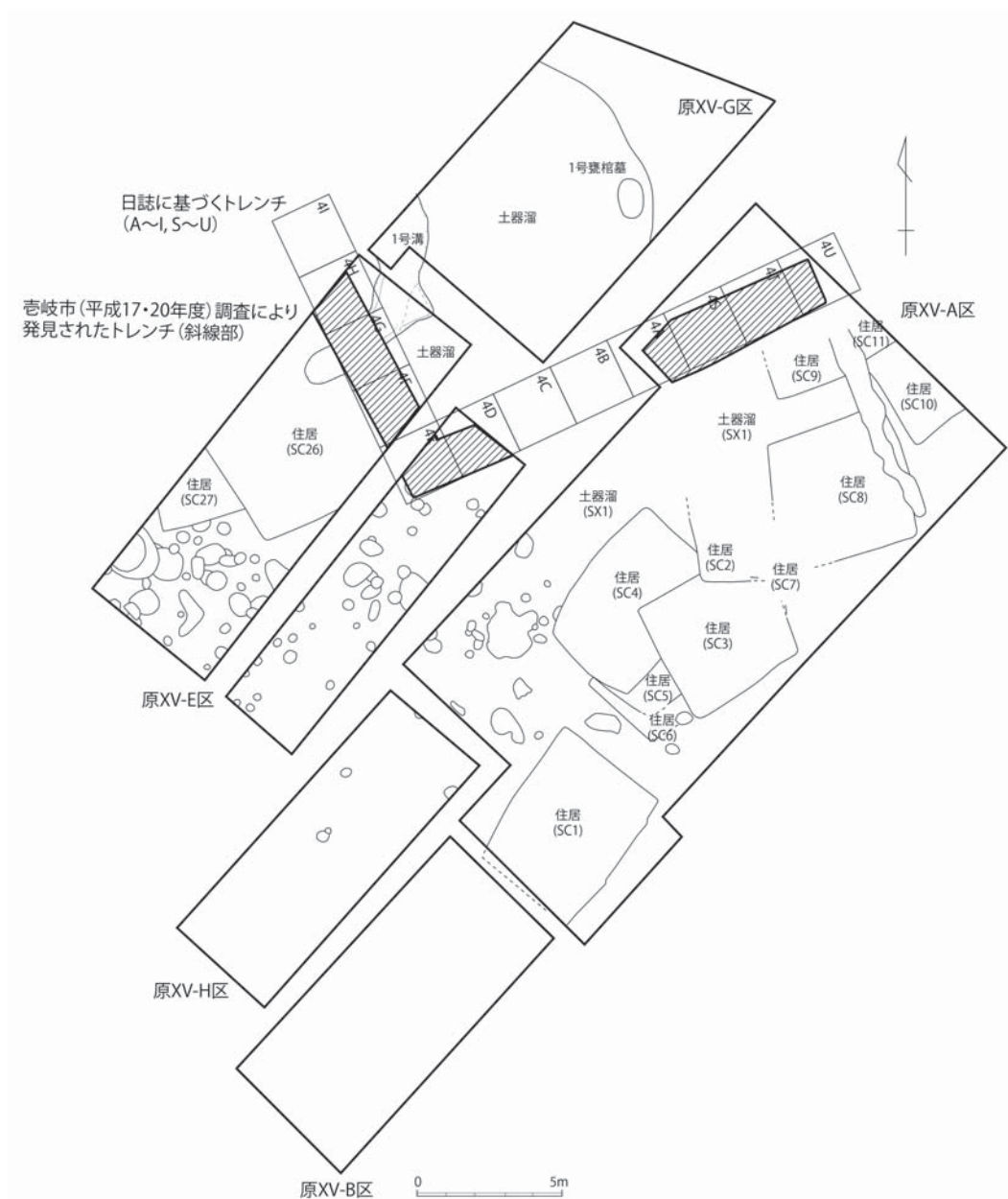


図20 第2次調査（1953年）第4トレンチと沓崎市教育委員会発掘調査地点との関係（縮尺1/250）

ころから、遺跡周辺の二次林からもたらされたものであろう。

このように、1号住居址である円形住居址の年代は、G'G'の炭化米の炭素年代と、この地点の出土土器から弥生中期の須玖Ⅰ式のものである。さらに、1号住居址を切って作られた方形の2号住居址は、炭化材の炭素年代から弥生後期のものである。

この他、トレンチO・P区から土器がまとまって出土している（図14、図版2-1）。これらは第4章で詳述するように、古墳時代前期のものが中心となる。また、S・T区でも土器片が集中して出土している（図15）。これらの土器は、日誌には須玖式土器と記されていたが、遺物の再整理調査の課程では、残念ながらこれらの土器を特定することができなかった。

（4）第3トレンチ

2×2mのトレンチをA～I区まで南北に長さ18mに渡って設置した（図16）。饅頭畑の最も高い

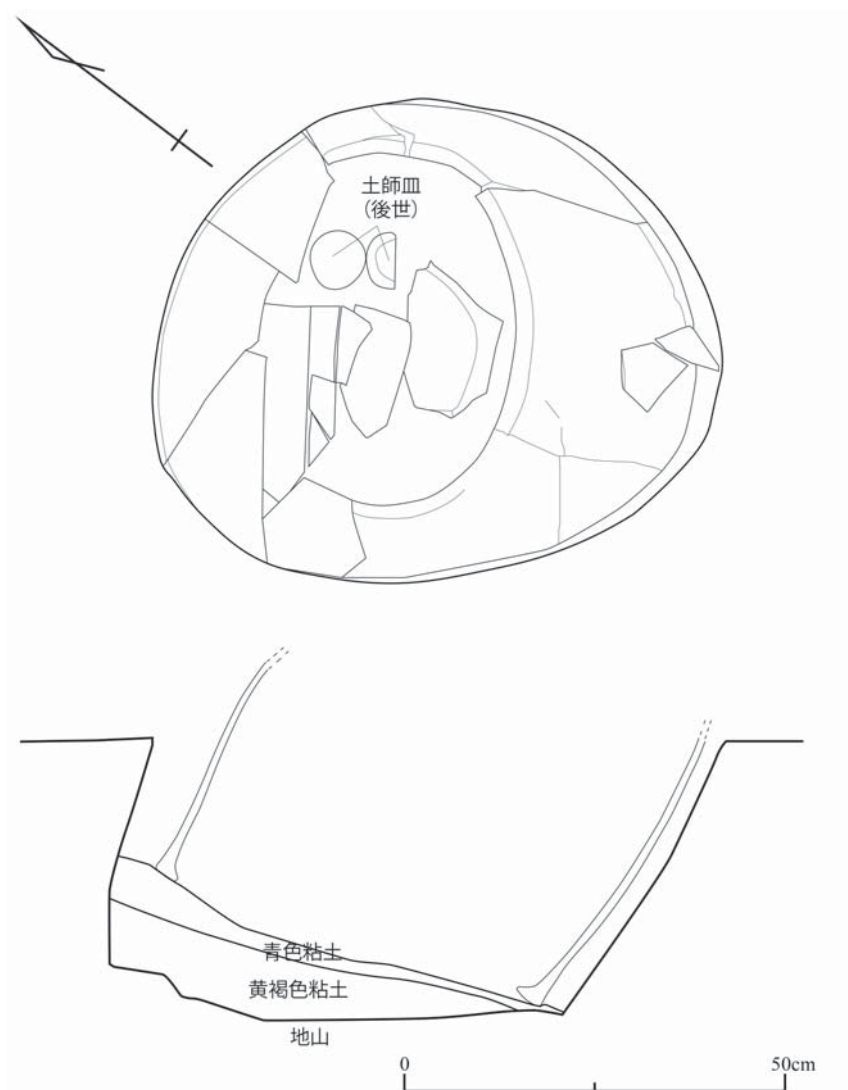


図21 第2次調査（1953年）第5トレンチ甕棺出土状況（縮尺1/10）

ところがAトレンチであり、トレンチA区から北側に向けて次第に地表面が低くなっていく。弥生時代包含層である褐色層と黒色層が残るトレンチA区からF区までには柱穴が検出されており（図版5-1）、それ以北のG～I区では、遺構面が削平されている可能性がある。第2層の褐色土は高三瀧式を含み、第3層の黒色土には須玖式を含むと日誌には記載されていた。これら検出された柱穴は、第3層の黒色土下面の床面粘土層すなわち地山面で検出されたものであろう。各柱穴の形態や断面は、図17のように記録されている。4号柱穴内からはカリガラス製のガラス玉が発見されている。これら柱穴の年代は、第2層から第3層の遺物年代である弥生中期から弥生後期のものであろう。

（5）第4トレンチ

2×2mのトレンチをまず東西方向にA～Eの五つの区として設定した（図版5-2）。さらにトレンチA区の東側に三つのトレンチを伸ばすとともに、トレンチE区から北方向にF～I区の四つのトレンチを伸ばした（図18）。トレンチI区からは、古墳時代前期の土器群がまとまって出土している（図19、図版5-3）。トレンチI区は、層位図によれば、地山が一段低くなっているところから、ここに遺構があった可能性がある。出土土器群はこの遺構内のものであるかもしれない。E・Fトレ

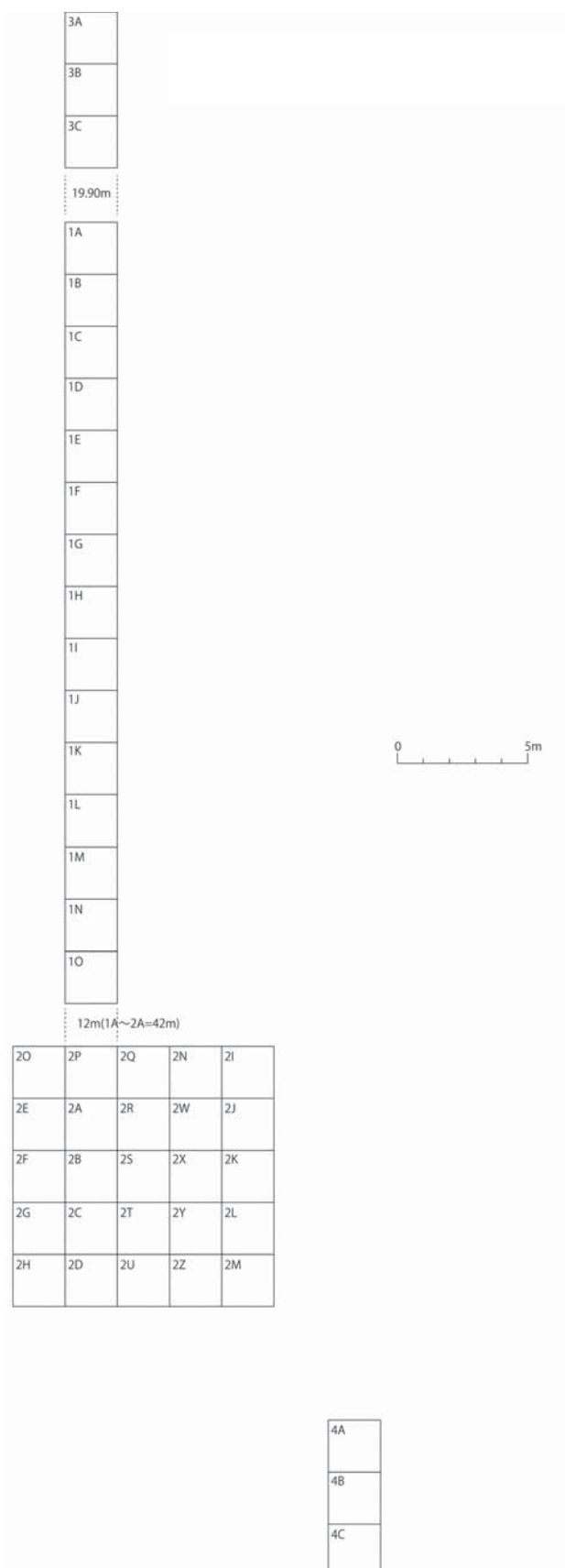


図22 第4次調査（1954年）のトレンチ配置

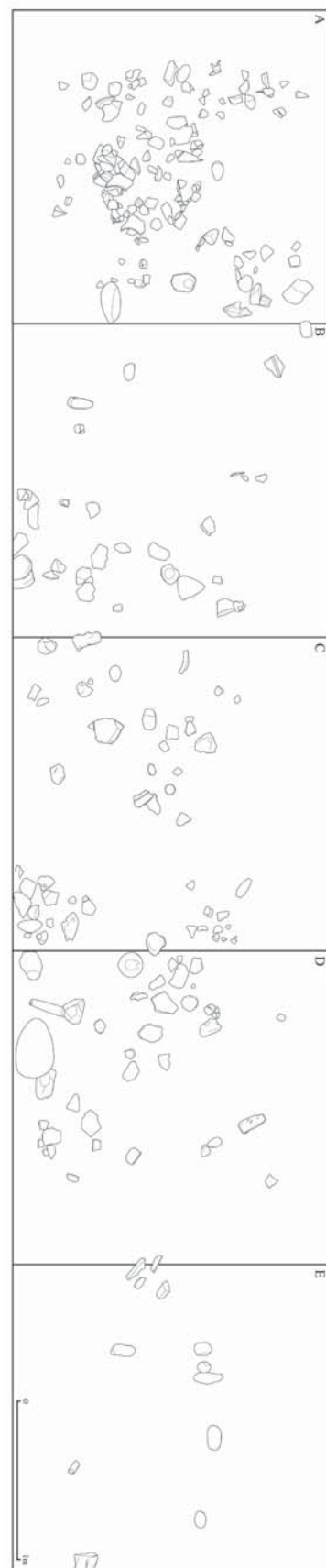


図23 第4次調査（1954年）
第1トレンチ A～E区遺物出土状況

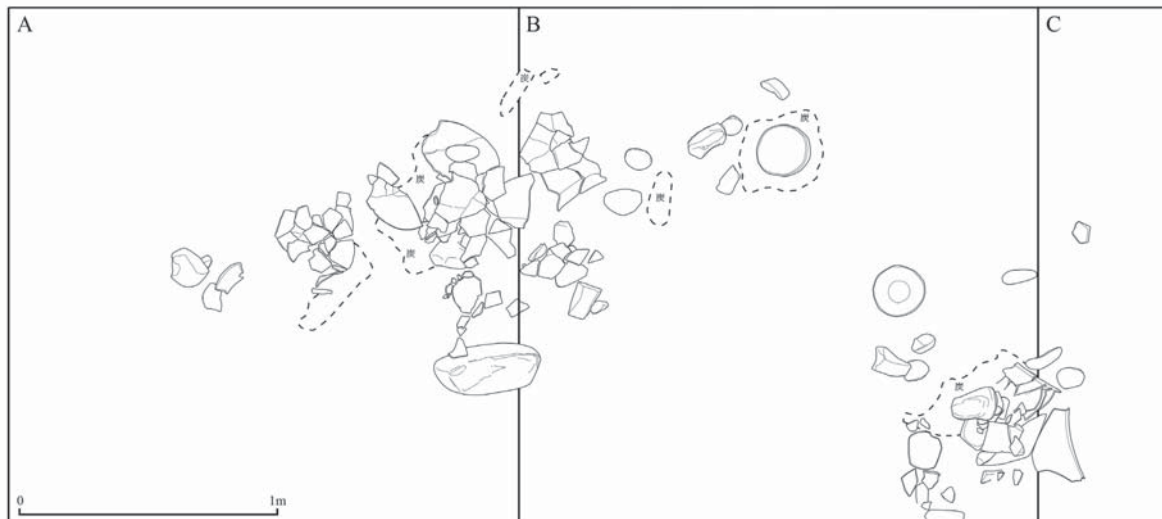


図24 第4次調査（1954年）第1トレンチ A・B 区上層遺物出土状況（縮尺1/150）

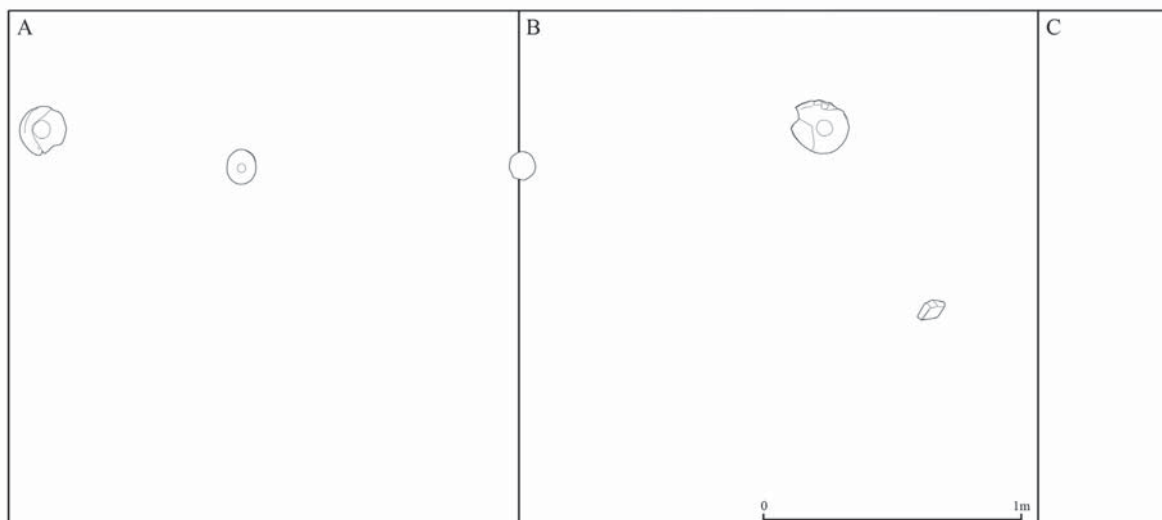


図25 第4次調査（1954年）第1トレンチ A・B 区下層遺物出土状況（縮尺1/30）

ンチの西側側面では三つの柱穴を、E トレンチの北端でも一つの柱穴を検出し、合計4基の柱穴を発見した。また、U トレンチ中央で、炭化米が充填された土坑を検出した。多量の炭化米は出土地点不明として保存されていたが、この炭化米がU トレンチの土坑出土のものであろう。炭化米の炭素年代の暦年代は495calAD -535calAD（43.5%、1 σ ）、423calAD-541calAD（95.4%、2 σ ）であり、古墳時代中・後期に相当する。第4トレンチからは古墳時代前期の土器もまとまって出土しており、この土坑はそれに続くものである。古墳時代中・後期の遺構であれば、原の辻遺跡では数少ない発見例となる。

さて、壱岐市教育委員会が平成17（2005）・18（2006）年度に、原X V 区を発掘調査した際に（図20）、第4トレンチを発見している（長崎県壱岐市教育委員会2006・2009）。トレンチG 区は壱岐市調査の1号溝に、トレンチF 区は壱岐市調査の土器溜に、トレンチT 区は壱岐市調査の住居址SC 9に相当している可能性がある（図20）。第4章で示すように、トレンチH・I 区から古墳時代前期の土器がまとまって出土しており、古墳時代前期の方形住居址SC26（長崎県壱岐市教育委員会2009）に

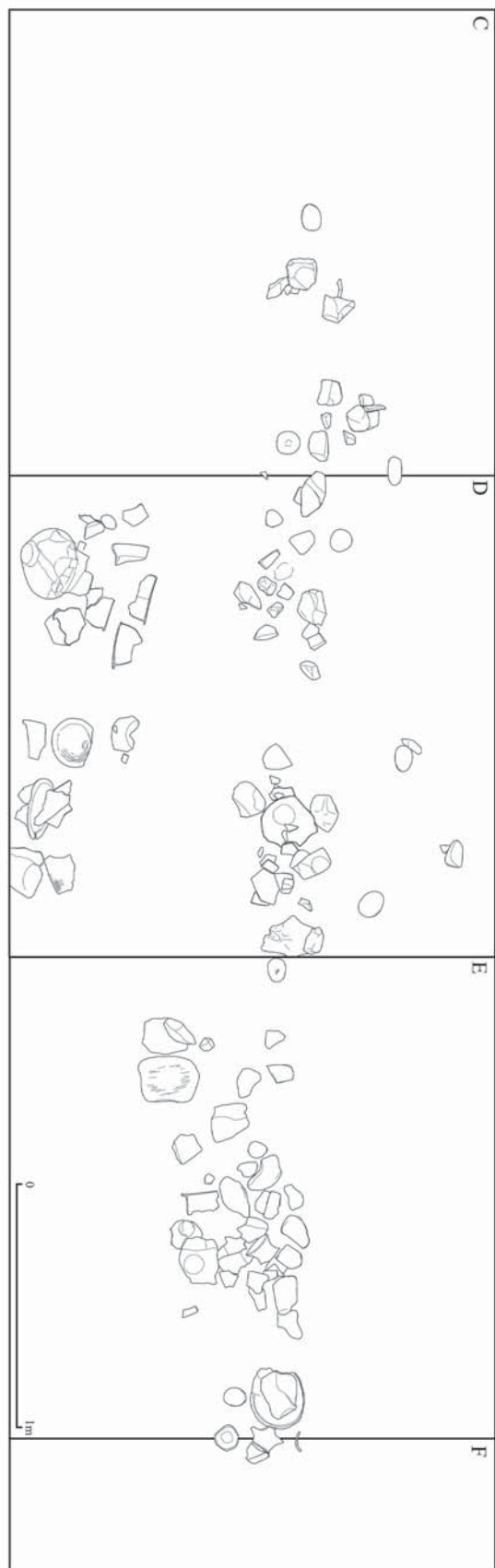


図26 第4次調査（1954年）
第1トレンチ C～E 区下層遺物出土状況（縮尺1/30）

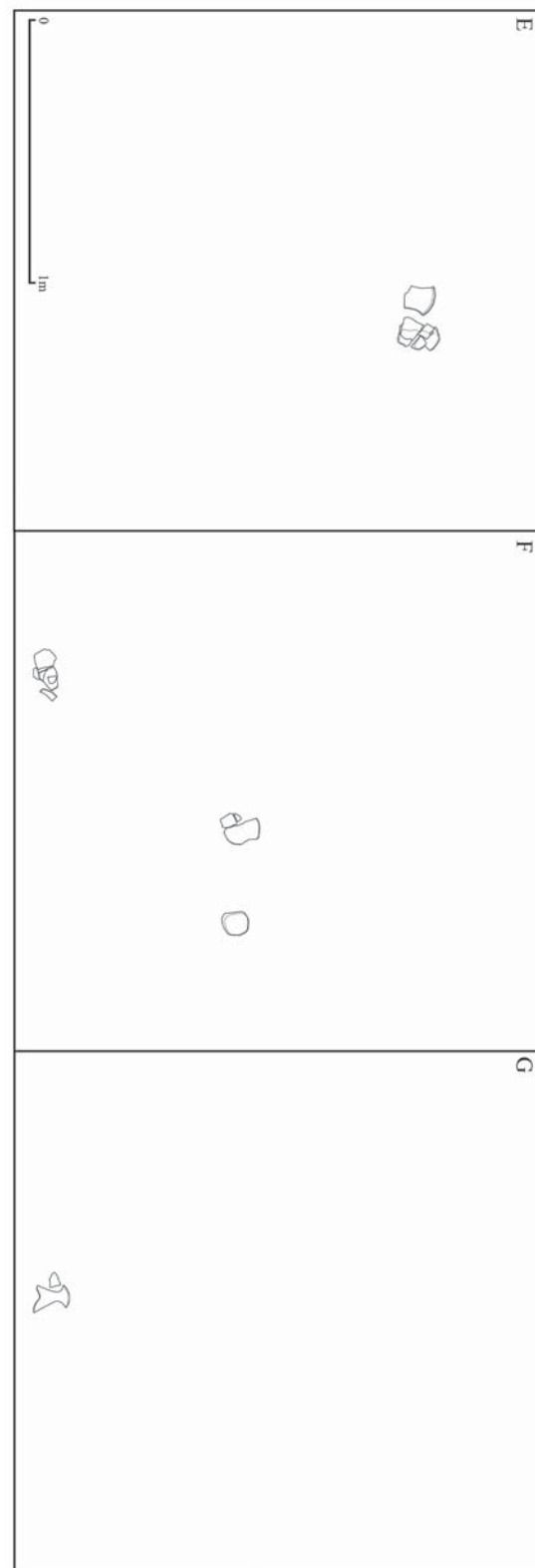


図27 第4次調査（1954年）
第1トレンチ E～G 区上層遺物出土状況（縮尺1/30）

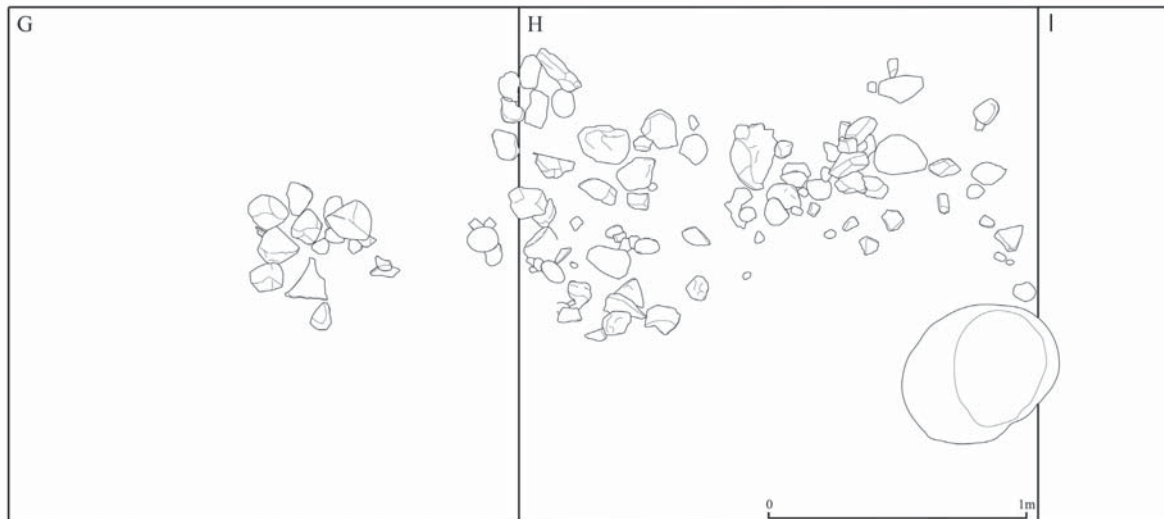


図28 第4次調査（1954年）第1トレンチ G・H区上層遺物出土状況（縮尺1/30）

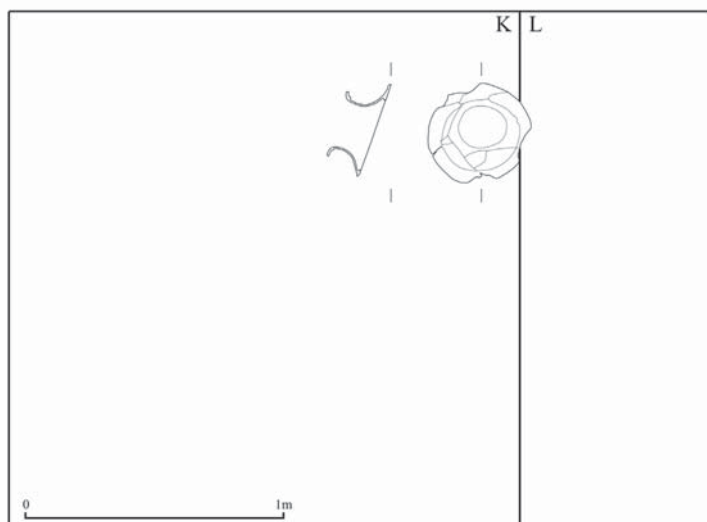


図29 第4次調査（1954年）第1トレンチ K区下層遺物出土状況（縮尺1/30）

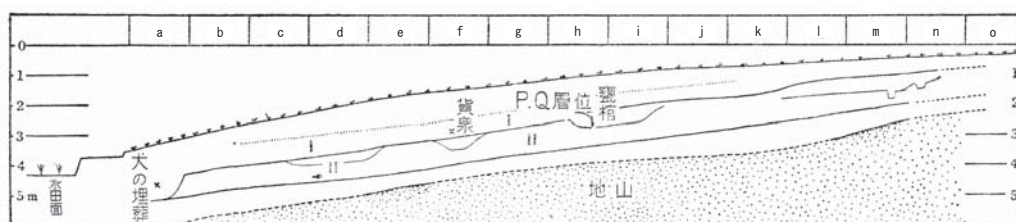


図30 第1次調査（1951年）第1トレンチ層位図

伴うものであるかもしれない（図20）。なお SC 9 の方形住居は弥生中期の SX1 の土器溜りより新しいものとされている（長崎県壱岐市教育委員会2006）。また、トレンチ E・F 区で検出された柱穴の一部は、壱岐市調査の住居址 SC26 に伴うものであるかもしれない。トレンチ U 区の土坑は、壱岐市調査の住居址 SC 9 または SC11 に伴うものである可能性がある。

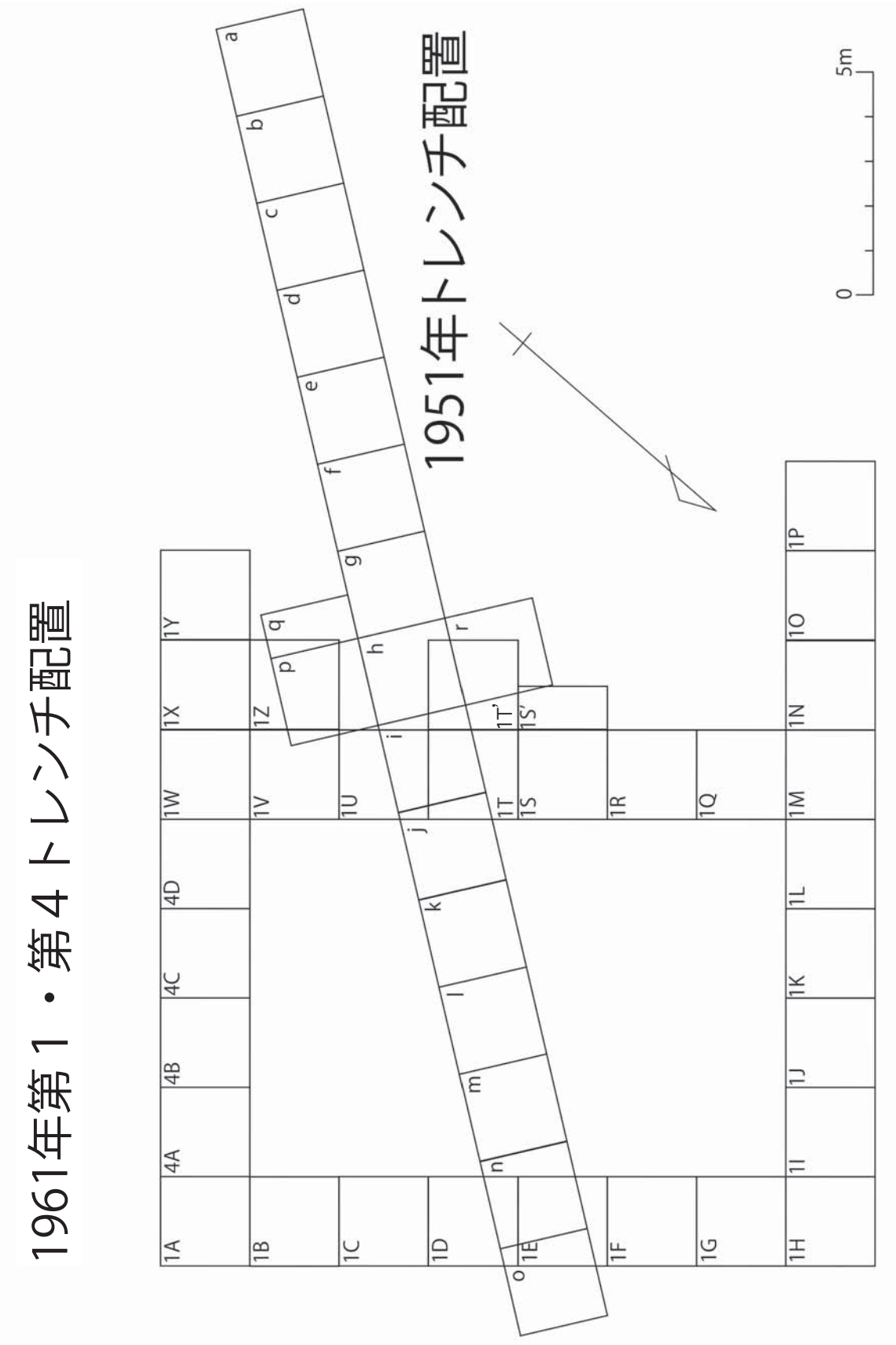


図31 第1次調査（1951年）第1トレンチ、第5次調査（1961年）第1・第4トレンチ配置図

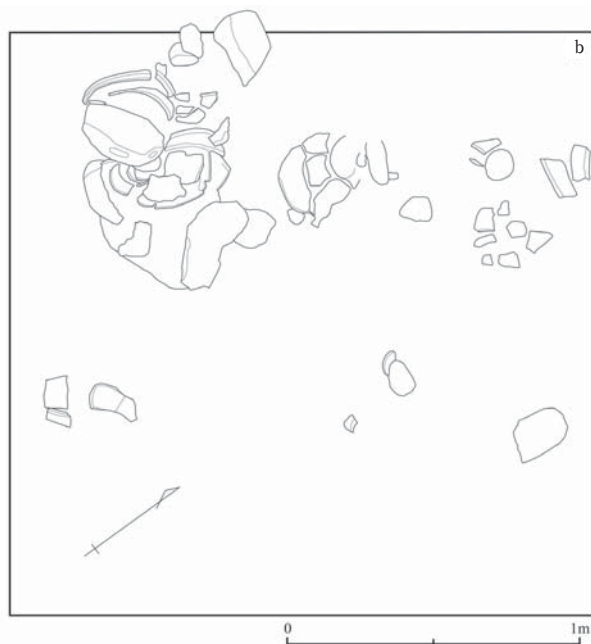


図32 第1次調査（1951年）
第1トレンチ b 区遺物出土状況（縮尺1/25）



図33 第1次調査（1951年）第1トレンチ e・f 区遺物出土状況（縮尺1/25）

（6）第5地点（甕棺墓）

第4トレンチのかなり南側で甕棺墓が発見された（図21、図版6-1）。結果的に甕棺墓の位置は、1954年調査の第1トレンチの南側約20mに位置していた。口縁部を墓壙下面に接するように配置するものであり、倒置式の甕棺である可能性がある。糸島平野から唐津平野では倒置式の甕棺墓が流行するところから、こうした地域の墓制が壱岐にも伝来した可能性がある。甕棺は第4章の115（図49）の汲田式甕棺である。なお、検出面では甕棺の胴部から底部が削平されていたが、削平面で、中世の

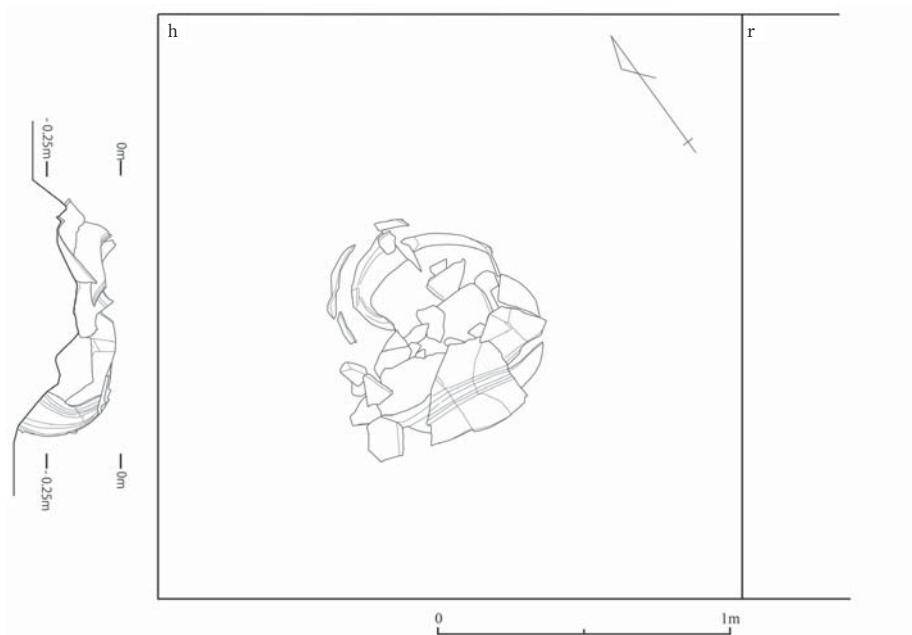


図34 第1次調査（1951年）第1トレンチh区出土小児甕棺墓（縮尺1/25）

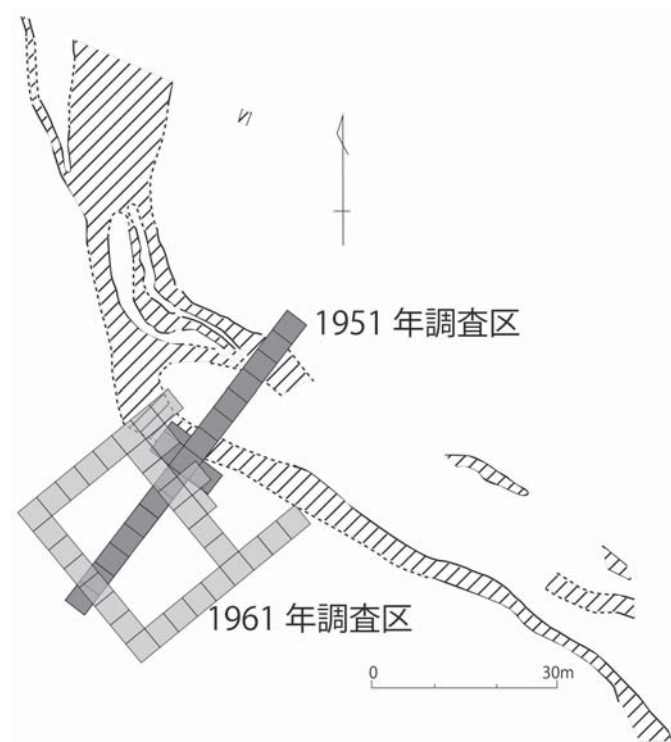


図35 第1次調査（1951年）・第5次調査（1961年）と環濠の位置

土師器皿が存在し（図21）、中世に甕棺墓が破壊された可能性がある。この土師器皿は、甕棺を掘り込むようにして火葬人骨を埋葬する際に、供えられたものと考えられる。

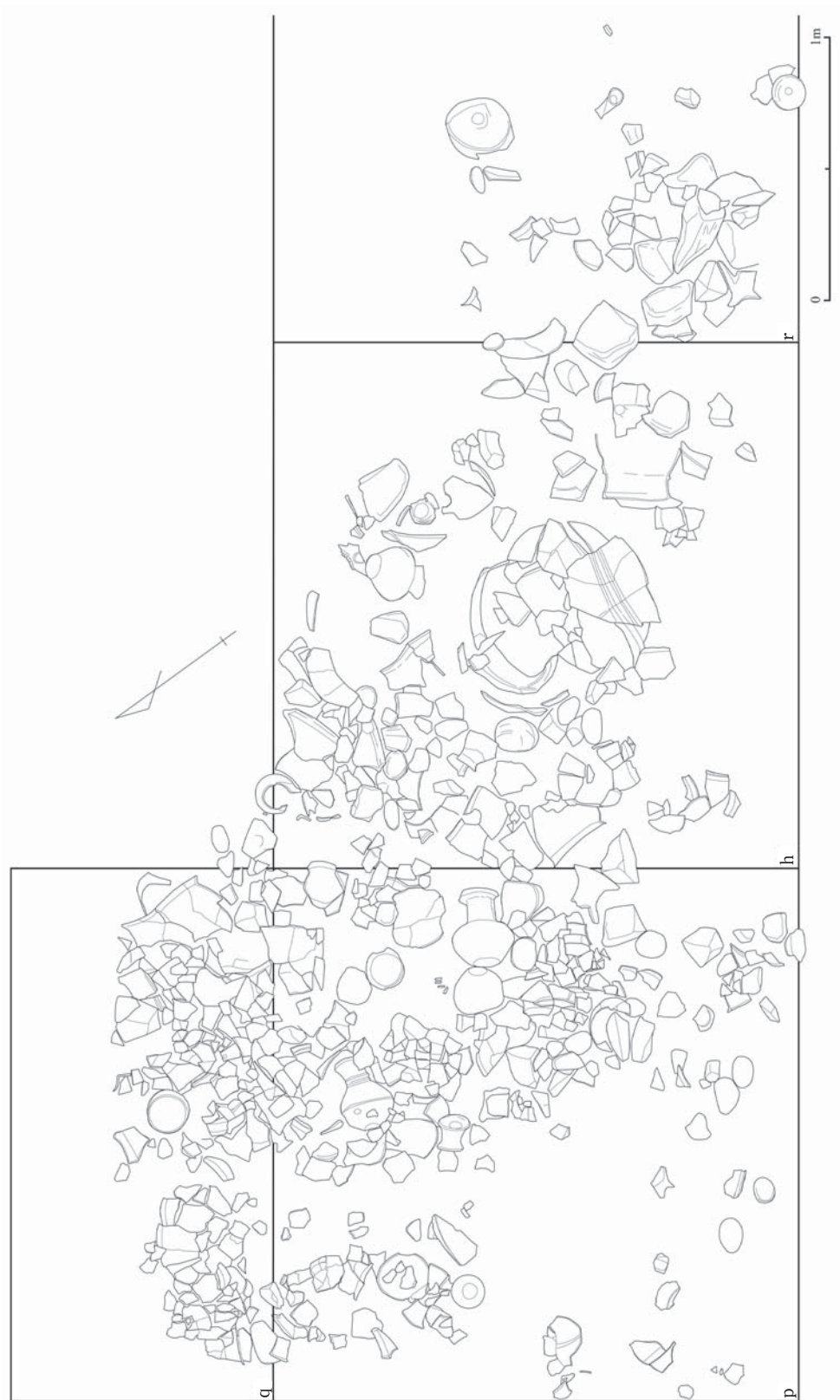


図36 第1次調査（1951年）第1トレンチh・p～r区上層遺物出土状況（縮尺1/25）

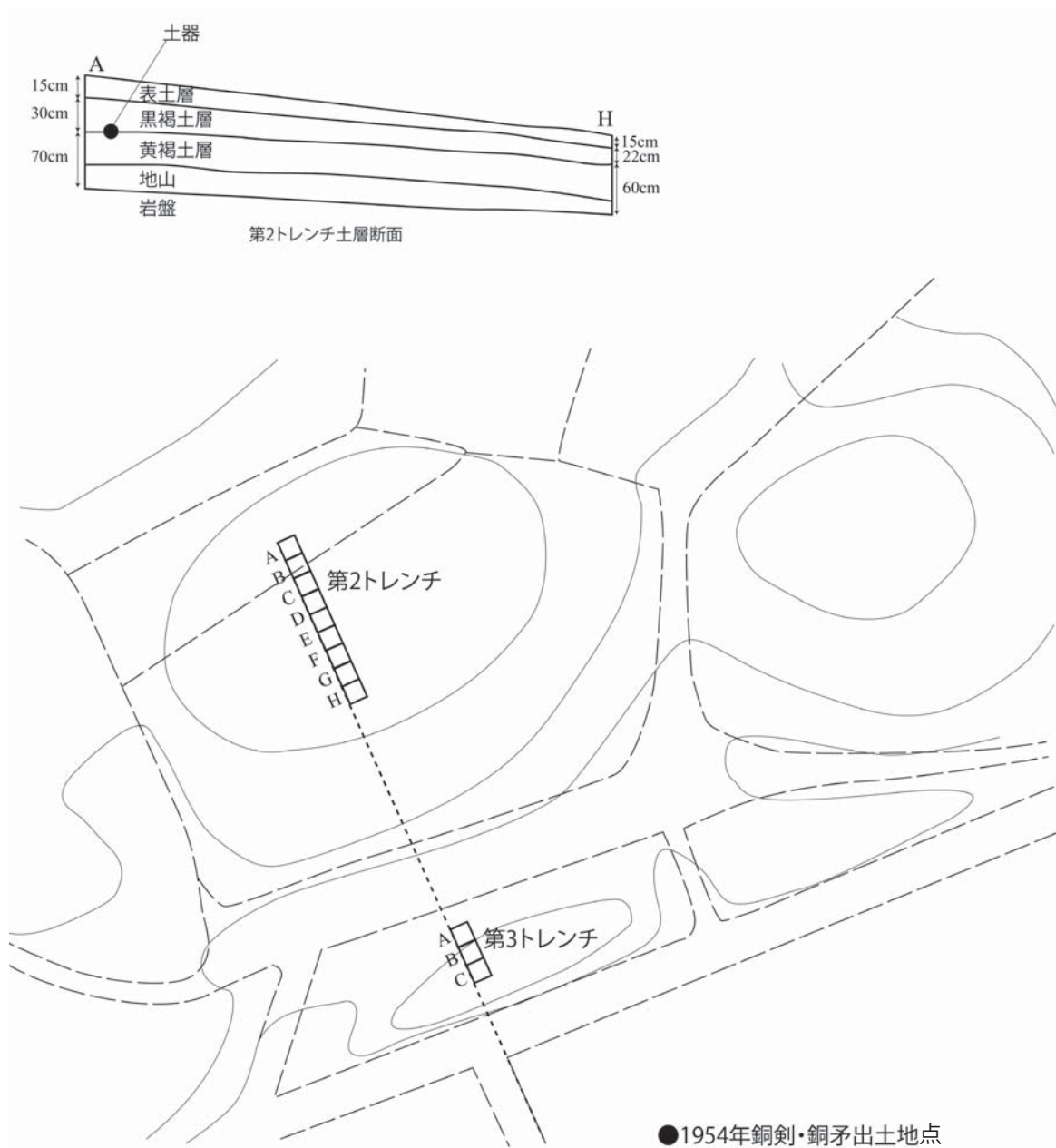


図37 第5次調査（1961年）第2・第3トレンチと層位

3. 第4次調査（1954年）の調査区の遺構と層位

（1）トレンチの配置

第3次調査5地点で発見された甕棺墓の北側において、漢式土器片を採集したところから、ここを第4次調査地点とすることとなった。第3次調査の低丘陵中部からさらに南側の低丘陵基部に位置しており、東西方向に第1～第4までのトレンチが配置された（図22）。

（2）第1トレンチ

2×2mのトレンチをA～O区の長さ30mに渡って東西方向に設置した。このうち、トレンチA～E区では表土下の第1面で遺物が集中して出土した（図23、図版8-1）。さらにその下部の上層

では、トレンチ A～B 区で遺物がまとまって出土している（図24、図版7）。ここでは、出土土器の周辺に炭層が認められる。さらにその下部の A・B 区下層では遺物はほとんど出土していない（図25）。一方、トレンチ C～E 区では上層で遺物がほとんどみられないが、その下層では遺物が集中して出土している（図26、図版8-3）。続く E～G 区トレンチの上層は遺物の出土が散在しているが（図27）、トレンチ G・H 区の下層（図28）ならびに K・L 区トレンチの下層（図29、図版8-2・4）では遺物が集中して出土している。これらは、後に述べるように、低丘陵基部側で長崎県教育委員会によって発見された内環濠に相当する部分の遺物出土様相であろう。したがって、遺物が比較的集中するトレンチ A～L 区の間が環濠部分に当たると考えられる。H 区の黒褐色土層すなわち第2層は原の辻遺跡上層に相当するが、ここから木炭が出土している。木炭の放射性炭素年代は、128calAD-203calAD（68.3%、1 σ ）、113calAD-226calAD（90.7%、2 σ ）である。第4章の出土土器の検討によれば、内環濠の上層は高三瀧式と下大隈式の弥生後期の包含層であり、炭素年代の紀元後2世紀はほぼ下大隈式段階にあたり、内環濠の埋積年代を示していると考えられる。

（3）第2トレンチ

第1トレンチの東側12mのところに設置された（図22）。まず A～C 区トレンチを設置し、柱穴8基を検出した。その後トレンチを拡張し、E～G 区トレンチと O・P 区トレンチおよび D・H 区トレンチを設置した。O・P 区トレンチおよび F・G 区トレンチで土器の集中地点が認められた。さらに、Q～U 区トレンチを設定し、遺物包含層である黒色土層の土器はほとんど須玖式土器であることを確認した。第2トレンチは、最終的に I～N 区・W～Z 区のトレンチまで拡張され、1辺10m×10mのトレンチとなった。そこでは柱穴ならびに土坑が発見され、堀立柱住居などの何らかの遺構になる可能性がある。

（3）第3トレンチ

第1トレンチの西側で設定されたトレンチである（図22）。A～C 区トレンチと比較的小さなトレンチである。地表下1mのところで須玖式土器片を含む包含層である黒褐色土層が認められた。

（4）第4トレンチ

第2トレンチの北西側に設定された A～C 区の比較的小さなトレンチである（図22）。日誌には遺物出土の記載はない。

4. 第1次調査（1951年）・第5次調査（1961年）の調査区の遺構と層位

（1）第1次調査

1951年の第1次調査では、1939年に鴫田忠正氏が調査した原の辻の台地東北端の崖（鴫田1944）に接したところにトレンチが設定された（水野・岡崎1954）。トレンチは崖面に直交するように崖面上部の2m×2mのトレンチ o 区から崖面下部の2m×2mのトレンチ a 区までの全長30m、幅2mのトレンチが設定された（図31）。第1次調査の層位は斜面堆積をなし、上層の第I層と下層の第II層からなる（水野・岡崎1951）。第I層はトレンチ i 区から始まりトレンチ a 区まで続いている。一方、第II層はトレンチほぼ全面に存在していた（図30）。

上層の I 層からは b 区で壺棺が出土している（図30～32、図版13-2）。検出時には既に壊れていたが、壺棺の上を石で囲み粘土で包んでいた。小児棺と考えられている（水野・岡崎1951）。この壺棺は第4章の249の土器（図61）が当たるであろう。また、h 区でも壺棺が出土している（図34、図版11-2・12-1）。頸部および胴部に2条の突帯を巡らせるもので、第4章の265（図63）が相当する。

口縁部は埋葬当時欠損しており、蓋に壺の破片を使い、30°の傾斜を以て壺棺が配置され、周りは石で覆われていた。中には5、6歳の小児の頭蓋骨、下顎骨、四肢骨があり（図版12-2）、小児棺で間違いない。ガラス製小玉3個、鉄斧の破片、釣り針状鉄製品が見いだされるとされる（水野・岡崎1951）が、この内、ガラス製小玉は副葬品の可能性がある。なお、これらガラス玉は、現在所在地不明である。また、第1層を低く掘り下げた土坑の中にはほぼ全身の犬の骨格が残されていた（図版13-1）。頭部には丹塗りの壺があり、犬の埋葬に伴う副葬品のようにもみえる。丹塗壺は形態から、第4章の出土地不明の318（図69）が相当しよう。e・f区の第I層では土器の集中地点が見いだされた。ここからは貨泉、棒状鉄製品、袋状鉄斧が出土した（図33）。

下層の第II層は包含層であり、遺構は発見されていない。岡崎敬は、下層の第II層を須玖式、上層の第I層を原の辻上層式とした（水野・岡崎1951）。すなわち原の辻上層式は、高三瀧式と中期の須玖式の中間とするものである。しかし、高倉洋彰は、弥生後期中葉から後半の高三瀧式から下大隈式への移行期段階の土器に相当するものとしている（高倉1982）。実際には、原の辻遺跡上層は弥生後期の高三瀧式から下大隈式が混在した状況にある。岡崎敬は、下層の第II層を貨泉の出土などを含めて前漢から後漢初期と考えた。この第I層を原の辻上層式として、後漢前期の志賀島出土金印の時期と考えた。さらにその上層として鴫田忠正氏の第3層の高三瀧式（鴫田1944）を当て、原の辻遺跡は弥生時代終末期まで続くものとみていた（水野・岡崎1951）。しかしながら、これらの上下層は安定的な斜面堆積をしていたわけではなく、長崎県教育委員会によって発見された環濠（図35）が、こうした文化層中に存在しており、実際の層位断面図はもっと複雑なものであったろう。また、岡崎敬は、鴫田忠正氏の第3層の高三瀧式（鴫田1944）に続くものとして、e・f区の異質土器を当てていた（水野・岡崎1951）。このe・f区の異質土器とは、第4章で検討するように、古墳時代前期の土器と考えられる。第1次調査の段階から、原の辻遺跡は、弥生中期の須玖式から弥生後期、弥生終末期、さらに古墳時代前期まで存続する遺跡であることが、一定程度予想されていたと言えよう。

第1次調査のh区では第I層で土器が集中して出土するところから、h区の両側にp・q区とr区が拡張された。第I層ないしその下面には、p区からr区まで、北西から南東方向に土器が帯状に集中して出土している（図36、図版10-3・11-1）。これは、環濠に相当する部分と考えられる。長崎県教育委員会の調査の環濠と一致するものである。この地点の環濠が内環濠とすれば、外環濠はb・c区が相当すると考えられる（図35）。

（2）第5次調査

1951年調査区を再発掘する意味で、L字形のトレンチである第1トレンチA～P区（南北16m×東西18m）を設定した（図31）。続いてトレンチM区（図版15-1）の北にトレンチQ～W区を拡張し（図版15-2）、さらにトレンチW区の南側にトレンチX～Z区を拡張した。第1トレンチS区と1951年調査のトレンチr区の間にはトレンチS'区とT'区を拡張したが、第1トレンチS・S'区では土器が集中して出土している（図版16）。また、第1トレンチW・X区でも遺物が集中して出土しており（図版15-2）、これら遺物集中地点が内環濠に相当する部分である。すなわち、1951年第1トレンチ調査p～r区と1961年調査第1トレンチS・S'～W・X区の土器出土集中地点が内環濠に相当する。内環濠部分の1961年調査第1トレンチW・X区ではガラス玉が出土しており、環濠内の遺物である可能性がある。また、第1トレンチのT・U区では焼土層が確認され（図版17-1）、S'区上層では、砥石や焼け石が散乱しており、炉址の可能性が日誌で記述されているが、図や写真はなく、炉址であるかは不明である。さらにR区下層では、炭化米などの植物種子が出土している。その後、コの字形をなす第1トレンチを繋ぐように、A区とW区の間には第4トレンチのA～D区トレンチを設定



図38 第1次調査（1951年）・第2次調査（1953年）・第4次調査（1954年）・第5次調査（1961年）のトレンチ配置と環濠の位置（縮尺1/6000）

して、全体が口の字形を呈するトレンチとなった（図31）。第4トレンチD区からは遺物が集中して出土しているが（図版18-2）、この部分も内環濠に相当している可能性がある（図35）。なお、第1トレンチQ区出土の炭化材を年代測定したところ、125calAD-173calAD（47.4%、1 σ ）と110calAD-220calAD（89.6%、2 σ ）の測定値を得た。弥生時代後期後半の年代であり、上層の年代を示している。この炭化材はサンショウ属であり、遺跡周辺の2次林によるものである。

1961年調査の第2トレンチと第3トレンチは、1954年の銅剣・銅矛出土地点の西側の丘陵斜面部に設置された（図6）。第2・第3トレンチは、隣接した二つの饅頭畑に、それぞれ16m×2mのトレンチA～H区と6m×2mのトレンチA～C区が設置された（図37）。このうち、第2トレンチH区では、第3層の黄褐色土層を掘り込んだ柱穴が発見されている。また、第2トレンチA区の北側を拡張したところから甕が2点出土しており、合わせ口の小児甕棺である可能性がある（図版18-1）。これらの甕の一つは第4章の430（図82）であり、須玖I式である。さらに、第2トレンチのN区から小児甕棺である可能性がある甕が出土しているが（図版17-2）、現在、その所在は不明である。

第5トレンチは、第1・第4トレンチの西側に隣接した位置に、長さ12m×2mのトレンチA～F区が設置され、その後、さらに南に向けてトレンチG・H区が設定されている。遺構検出状況などについては不明である。

5. まとめ

1951年の第1次調査と1961年の第5次調査第1・4・5トレンチは、原の辻台地北西端に位置し、

多重環濠の内環濠と外環濠部分に相当している（図38）。第1次調査では、上層と下層に分層され、原の辻上層式が設定された。当時の原の辻上層式の想定年代は、今日で言う弥生中期の須玖式と弥生後期の高三瀦式との中間に位置づけするものであった。しかし、型式区分できるように明確に層位区分できたかは不明である。なぜなら、斜面堆積層の一部は環濠に相当しており、単純な上下の層位関係にはならないからである。第5次調査の環濠部分でも上下層に分層して遺物が一部取り上げられているが、下層は弥生中期の須玖式で、上層は弥生時代後期から古墳時代前期に概ね分けることができる。原の辻上層式という型式名を付すことは難しく、原の辻遺跡の環濠上層部分は、弥生後期から古墳前期に相当する。

1954年の第4次調査は、原の辻遺跡の台地基部に近い地点に設置されたが、第1・第2トレンチが南側の多重環濠の内環濠に重なるように設定されていた（図38）。環濠部分には、土器が集中して出土している。また、1953年の第2次調査の第5トレンチからは、汲田式の甕棺墓が出土している。これは南側の多重環濠の外側に位置している（図38）。環濠の南側には原ノ久保の墓域 A・B・C の三つの墓域が存在するが、それよりさらに北側に位置するものである。第3次調査第5トレンチ付近にも新たに墓域が確認される可能性を示すものである。

一方で、1953年の第2次調査は、多重環濠の内部の集落の中心に位置している（図38）。第2・第4トレンチでは、弥生時代と古墳時代前期の竪穴住居址が検出された。また、焼土層を伴う遺構は鍛冶関連遺構である可能性がある。

参考文献

- 高倉洋彰1982「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、801-836頁
- 鶴田忠正1944「長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』
- 長崎県壱岐市教育委員会2006『特別史跡 原の辻遺跡—史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査—原XⅤ区・原XⅣ区・高元Ⅲ区・高元Ⅳ区 石田大川604区・石田大川605-1区』（壱岐市文化財調査報告書第9集）
- 長崎県壱岐市教育委員会2009『特別史跡 原の辻遺跡—史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査—高元Ⅷ区・原XⅤ区・原XⅦ区』（壱岐市文化財調査報告書第1集）
- 長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ—平成16年度までの調査成果—』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第30集）
- 水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』古今書院、295-309頁